蒼と秩序の力と魔法少女

総長

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年、朝倉宗介は病気が多かった。
だが、少年は諦めなかった。
しかし、少年は亡くなった。
目が覚めると神様がいた。
こうして少年は４つの特典と４人と１体の連れて、
魔法のある世界に行った。

目　次

転生と原作開始前
転生と仲間達 ―― 1
市内捜索と、ある少女の出会いと悩み ―― 5
誘拐と正体と死神 ―― 11
蒼ととある高校生と来るべき再開 ―― 25
ラグナ達、学生になる!? ―― 37
波乱とＩＱ２００の人 ―― 46
白い天使、黒い死神降臨 ―― 51

転生と原作開始前
転生と仲間達

少年は体が弱かった。
5歳の頃から肺炎にもなったりしたが少年は耐えた。
だが、がんになってしまった。
少年は心の中で願った。

（次がある時は病気がかからない体がいいなぁ…）

と、そう願いました。

「ここはどこ？」
辺りは白一色であるのは二つの扉があるだけでそれ以外は何も無い。
しばらくして、扉の間から誰かが来た。
「貴方は誰ですか？」
白い服を着た女性に話しかけて見ました。
「私は神様よ。君がここにいるってことは死んでしまったのね。」
病気が大きかったのが分かって仕方がなかった。
「まあ、仕方ないか」
神「随分と冷静だね…まあ、いいか。ところで君！名前は？」
と言って僕に指を差した。
「僕ですか？」
神「むしろ君以外に誰かいると思う？」
「そうですね。僕の名前は、朝倉宗介です。」
神「朝倉宗介ね…分かったわ。よろしくね、朝倉くん。」
朝「よろしくお願いします。」
と頭を下げました。

朝「ところで、ここはどこなんですか？」
そう言って神様に聞きました。
神「ここは、生と死の間よ。」
と神様は言いました。
神「この扉は転生するかしないかの選択を選べるようになる。」
神「さあ、どうする？」
朝「転生するとどうなるですか？」
僕は神様に聞きました。
神「ランダムで４つ特典が貰えるようなる。」
と神様は答えました。
朝「分かりました、転生します。」
そう言って箱を出しました。
神「よし、この中から４枚引いてくれ。」
箱の中から４枚引きました。
（病気にかからない丈夫な体がいいなぁ…）
神「紙に書いてあるのが特典だ。開いて見せてくれ。」
神様に言われた通りに開きました。
結果
特典：ウィングゼロ（ＥＷ）・蒼の魔導書（ブレイブルー）・イデア機関・超味覚
僕は神様に特典の紙を開いて見せました。
神「朝倉くん、運いいわね。」
神様はそう言って喜んでいたが、僕は不安だった。
（せめて病気にかからない体が良かったなぁ…）
僕はそう思ったが決まったことなので仕方ないから諦めた。
朝「転生の扉はどっちですか？」
神「右の扉よ。」
僕は神様の言われた通りに右の扉を開けようとしたが、
ガチャガチャガチャガチャ
朝「神様～あきませんよ。」
僕は神様を呼びました。

神「おかしいわね～いつもだったら開くのに。」
朝「何か忘れていないんですか？」
僕がそう言うと神様は思い出したように、
神「そうだ！召喚と転生する場所言ってなかったね。」
と、言いました。
朝「召喚って何？」
僕は神様に質問しました。
神「召喚とは、簡単に説明すると別の世界からこっちの世界へ来るようにすることだよ。」
神様は簡単に説明しました。
神「それじゃあ召喚しますか？」
神様は僕に確認を聞いた。
朝「召喚しましょう。」
僕がそう言うと神様は召喚の準備をしていた。
神「召喚は４回でランダムだから気を付けてね。」
僕は頷いた。
神「それじゃあ行くよ。召喚！」
そう言うと魔法陣が光出し、４人召喚された。
？「どこだここは？」
？「なんだ、この場所は？」
？「どこなんでしょうか？」
？「ここはどこなんだろう？ミネルヴァ、分かる？」
？「……」
から、白髪の男性、黄髪の男性と女性、茶髪の女性、灰色の女性（？）が、いる。
ってか、最後のは、人なのか？
とりあえず、名前を聞くことにしました。
朝「まあ、とりあえず自己紹介しましょう。僕は朝倉宗介です。よろしく。」
そう言って僕はお辞儀をした。
？「最初は俺からだな。俺はラグナ＝ザ＝ブラッドエッジだ。ラグ

ナでいい、よろしくな。」
？「次は僕だね。僕は、ジン＝キサラギだ。ジンでいい。」
？「次は私？私はノエル＝ヴァーミリオンです。ノエルでいいよ。」
？「最後は私か～私はセリカ＝A＝マーキュリーだよ！セリカでいいよ。こっちはミネルヴァだよ。よろしくね！」
？「……」
白髪の男性がラグナで、黄髪の男性がジンで、黄髪の女性がノエルで、茶髪の女性がセリカで灰色の女性（？）がミネルヴァらしい。
朝「それで、どこに転生するんですか？」
僕は神様に転生する世界を聞きました。
神「朝倉くんが、転生する世界は魔法少女リリカルなのはと言う世界よ。」
神様は僕に答えました。
朝「それじゃあ行きますよ。」
神「第二の人生を行けよ。」
神様は僕達に言いました。
そして、朝倉達は右の扉を開けて入りました。
神「朝倉くん、そこまで病気になりたくないのね…」
神様は朝倉の心を読んでいた。
神「決まったことだし、仕方ないか…」
神「元気でいるのよ。朝倉くん。」
神様は扉に入った、朝倉宗介の応援しました。

市内捜索と、ある少女の出会いと悩み

扉を開けると少し大きな家が見える。これが、僕達の家なのだろう。

セ「へぇ～大きい家だね！ねえ、中に入って見ない？」

セリカはみんなに聞きました。もちろん、入ることにしました。

ラ「へぇ～中は結構広いだな。」

家の中に入るとラグナはそう言いました。確かに5人で、住むには結構広いのです。なぜなら、

朝「何で空き部屋8つあるのは何故でしょうか？」

そう、5人に対し8つの空き部屋があるのだ。

ジ「5つは僕達が使って、あと3つは、客用に使えばいいだろう。」

ジンは、そう提案しました。確かに、そうすれば客が来た時に、対応が出来るからです。

僕達は、1つ空き部屋を開けました。ベッドと窓がある、そんな空き部屋でした。

朝「さて、そろそろ昼ごろだ、誰か料理出来る人いませんか？」

僕は、そう言って4人に聞きました。すると二人手をあげました。

ノ「私こう見えて料理ができ『やめろ』…って何でですか!?」

ノエルの料理を止めようとする、ラグナとジンがいました。

ラ「だって、お前、料理すると毒料理になるから。」

ジ「僕も、同感だ。」

ノ「二人とも、ひどい！」

君達、ひどいこと言うね…まあ、ノエルはいいとして、次は、セリカか…

セ「私は大丈夫よ。安心していいよ！」

とセリカは、得意げに言いました。

朝「よし、料理担当はセリカに決定！」

こうして料理担当は、セリカに決定しました。

そして、昼ご飯を食べた後は、今後どうするかをみんなで考えていました。

朝「さて、これからどうしましょうか？」
僕が質問するとラグナが答えました。
ラ「まずは、外に出て近くを捜索しよう。何かあるかもしれないからな。」
ラグナは、そう提案しました。
朝「じゃあそうしようか。」
そして、僕達は外に出て３人に別れて捜索することなった。
ラグナ、ジン、ノエルの３人、朝倉、セリカ、ミネルヴァの３人に別れた。
朝「いい？迷ったら今、話したいを思うことといいね？」
ラ「分かった」
こうして３人に別れました。

ラグナｓｉｄｅ
ジ「それじゃあ行こうか、兄さん。」
ラ「分かった、行くぞ。」
ノ「あっ、待ってください～」

～移動中～
ジ「図書館があるぞ。」
ラ「えっと、何々？海鳴市図書館…だってさ。」
ノ「ここって海鳴市なんですね。」
ラ「他にありそうなものは、ないな…仕方ない帰るとするか。」
ラグナ達は家に帰りました。

朝倉ｓｉｄｅ
朝「セリカさ～んどこですか～？」
この文章見て分かる通り、セリカさんがいないのだ。
朝「スーパー見つけただけよしとするか…」
しばらく、進んでいると、公園があった。
（公園があるなら、ここで遊べるな。ん？）

僕は公園に少女がいることに気づいた。
（何でこんな時間に？だが、呼びかけないとな。）
僕は少女に早く帰るように公園に入った。

高町ｓｉｄｅ
初めまして、私は高町なのはです・・・・誰向かって話してるんだろう？まあ、いいや、私は今公園で１人で遊んでいます。家ではいい子にしてないとダメだから、お父さんは入院していて、お母さんとお姉ちゃんはお店で忙しく、お兄ちゃんは強くなるために道場に篭っています。
そんな忙しい時に私のわがままで迷惑をかけるわけにはいかないから、１人で遊んでたんだけど・・・・・・・
な「・・・・・ぐすっ・・・・・うぅ・・・・・」
私は公園で泣いていました。迷惑をかけたく無くて、いい子にならないといけないけど、家族が遠くに感じてしまう。
すると、そこに
「あっ、あのすみませんがどうして、貴方は泣いているんですか？」
声がした方を見ると私と同じくらいの男の子（？）がいました。髪は白色で、目は蒼色の、男の子だった。私は一目惚れと初恋をしたんだと思うの。

朝倉ｓｉｄｅ
朝「暗くなる前に帰らないの？」
「家に帰るといい子でないといけないから。」
少女は暗い表情になっていた。
朝「・・・話したくないならそれでもいい。僕は無理に話せたくはない」
朝倉は少女にそう言った。
「いえ、あなたには聞いて欲しいです・・・・聞いてくれますか？」
〈ラグナさん、セリカさんを探すので遅れます〉
〈それなんだが宗介、セリカはもうこっちにいるだ。〉

〈ええ～…〉
もうそっちにいるんかい！まあ、いいや。
〈それならいいや、じゃ切るよ。〉
〈分かった。〉
そう言って通話を解除した。
すると、少女は戸惑っていました。
「聞いてもらってもいいですか？」
少女は、僕に聞いた。
朝「・・・あなたのペースでいい、ゆっくり話してください、何度でも待つから。」
「・・・・・・!!!!!（パァ」
朝倉がそういうと、先ほどの暗い表情からすぐに眩しいほどの笑顔になっていた。朝倉は少女の話を聞いていた。父親が入院している事、家族に迷惑をかけないようういい子になるようにしている事、でもそれが辛い事、ゆっくりと少女のペースで話す事を朝倉は黙って聞いていた。
「・・・・という事なんです。どうすればいいでしょうか？」
朝「・・・・・・・・」
話が終わった後、朝倉は考えていた。話を聞いていて朝倉は解決策を思いついた。
朝「・・・・我が儘くらい、聞いてくれるんじゃないか？」
「・・・・・・・え？」
やっぱり、同じだ。家族が忙しいから、いい子になろうとした、前の僕の憧れだったものだ。この少女はもういい子になっているから、僕の知らない苦しみを持っている。だからこそ、我が儘を言っていい思うだ。
朝「僕には家族がいないそのような事はわからない。だが、家族以上の人達もいる。その人達は、僕が我が儘を言っても快く了承してくれる。だから、あなたの家も大丈夫じゃあないのか？」
「・・・・・でも」
朝「・・・少なくとも、あなたの親は我が儘を言って欲しいと思っ

ているよ。」
「・・・・・・・!」
朝「あなたは既にいい子なのでしょう、だからこそ我が儘を言って欲しいと思っていると思いますよ。それとも、あなたの、家族との絆はそのような事で崩してしまうものですか?」
朝倉はそういうと、少女に視線を向ける少女は考えるような仕草でずっと悩んでいた。そして顔を上げた。だがさっきのような暗い表情ではなく、意を決したような顔だった。
「・・・・・うん!!お家に帰ったら、お母さんに言ってみる!!私がしたい事を!!私の我が儘を!!」
朝「・・・・そうか(ニコッ」
「・・・・・・・!!///」
そう決断した少女を朝倉愛くるしいと思い微笑んだ。すると、少女は、朝倉から視線逸らし、顔を赤くしていた。
やっぱり、自分に笑顔は似合っていなかったのかなぁ…
朝倉は少々焦ったが、すぐに冷静になった。そして、時計を確認する。時間を確認し、朝倉は立ち上がる。
朝「僕は帰るね。夕食の準備があるからな。」
「あ・・・・・うん・・・・ねぇ」
朝倉は帰ろうとするが、少女に呼び止められていた。
朝「なんでしょうか?」
「また・・・・・会えるかな?」
朝「また会えるかどうか、わからない。」
「あ・・・・・・・そう・・・・なんだ」
朝倉は振り返って少女を見ると、目に涙を溜めて今にも泣きそうだった。朝倉がわからないと言った理由は、ラグナの提案で自分の家を結界というもので隠して、魔法や戦闘の練習をしようという提案だった。
朝「話は終わりですか?僕はもう帰りますよ。」
そう言い朝倉は自分に家への道を歩き出す。すると
「待って!!」

朝「・・・なんでしょうか？」
朝倉は返事を返した。
「・・・・・なのは・・」
朝「・・・・・何？」
なのは「私の名前!!高町なのはって言うの!!あなたは!?」
なのはという子は、朝倉の名前を聞いていた。
そして、なのはを見つめて朝倉は名乗った。
朝「僕は宗介・・・朝倉宗介・・」
朝倉は自分の名を名乗った後、家への道を戻って行った。

なのはｓｉｄｅ
な「朝倉・・・・・宗介・・・」
私は自分を助けてくれた男の子の名前を呼んでいた。
な「宗介君・・・また会えるよね・・・／／」
私は宗介君の名前を呼ぶたびに身体の中が暖かくなる感じがした。
・・・なんだろう、この気持ち・・・嫌な感じではないんだけど・・
な「家に帰ったら話をして、この気持ちの事、お母さんに教えてもらおう・・・／／／」

誘拐と正体と死神

朝倉は帰っている途中、顔が紅くなっていた。
（むっちゃ、恥ずかしいんだけど。）
朝倉がなんでこんなに恥ずかしがっているのは、公園であった少女なのはにかっこいい所を見せたくて、後ろを向いて歩いたことが恥ずかしかった。正直やるのを、後悔しました。
（しかし、あれで良かったのかなぁ…）
朝倉は、あれで良かったのか、心配になりました。
朝「まあ、考えても仕方ないか…」
そう言って歩いているとなにやら声が響いた。
「いや!!!離してよ!!!」
「離してください!!!痛いです!!!」
「黙っていろ!!お前らを誘拐すれば金になるってリーダーに言われたんだよ!!」
響いた声は、二人の少女の声、そして一人の男性の声であった。どうやら男が二人の少女を誘拐している。
物影に隠れていた朝倉は男が誘拐している所を見た。
（あれはいけない）
そう思った朝倉は、ラグナに念話をした。
〈ラグナさん、大変です。少女二人が男に誘拐された。〉
〈なんだって!!分かった。今すぐに行く。〉
〈僕は一人で車を追います。〉
〈おい、待て、話はまだ、…〉
プツンとラグナさんとの念話を切りました。
そして、車を追いかけた。だが、車を見失ってしまった。
朝「どこに行った?」
朝倉は、完全に車を見失いました。すると、どこからともなく声が聞こえました。
「おい、聞こえているのか、貴様。」
どこから聞こえているのかと、思えば首飾りから、聞こえていまし

た。
朝「聞こえています。貴方は誰ですか？僕は、朝倉宗介です。」
ゼロ「俺か？俺はそうだな・・・ゼロでいい。さん付けなどはいらん。」
そう言ったゼロは僕に名前を言った。
朝「ゼロは僕のなんなの？どんな役割があるの？」
朝倉は、ゼロに僕のなんなのか、どんなことをができるのか、聞いた。
ゼロ「お前のデバイスだ。そして索敵、単独行動ができることだ。」
ゼロは朝倉に教えた。
朝「索敵!?じゃあ、車を探して!!」
ゼロ「任務了解。」
朝倉は、ゼロを待った。
ゼロ「見つけた。」
朝「本当に!?」
ゼロ「ああ、場所は海鳴港・・・誘拐犯が隠れるには絶好の場所だな・・・」
朝「行くよゼロ。」
朝倉は、歩いて行こうとした。だが、ゼロは、朝倉にこう提案した。
ゼロ「飛ばなくていいのか？」
朝「は？何言っているの？」
確かに、飛べば速く着くが、そんなのがあるのか？
ゼロ「試しにウィングゼロ、セットアップと、言ってみろ。」
朝倉は、ゼロに言われた通りにやった。
朝「わかりました。ウィングゼロ、セットアップ！」
そう、言うと腕、足、胴体に装甲が付き、背中に羽が付いた。その体は胸元に緑色に輝く宝石のようなものが埋め込まれており、白と青を基調とするツートンカラーの装甲を見に纏っていた。
朝「すごいですね!!」
ゼロ「宗介、背中を意識しろ。そうすると、羽が動く。」
ゼロがそう言うと朝倉は、背中を意識して羽を動かし、飛んだ。朝

倉は、喜んでいた。
朝「すごいよ!!僕、空を飛んでいる!!」
喜んでいると、ゼロは次のことを言った。
ゼロ「よし、飛んでいるな。次は変形と言ってみろ。」
朝「分かった。変形!!」
そう言うと羽が横に広がり体を真っ直ぐにし、変形が完了した。
朝「速い!!ここれならすぐに着く。」
そしてすぐ、港に付いた。
朝倉は、ゼロに装甲を解除させてもらいました。
ゼロ「宗介、倉庫の中に生体反応あるぞ。数は定かではないが、どうやら奴らの仲間だな。」
ゼロが索敵してくれていました。あとは、武器ですね。
朝「ゼロ、何か武器はないか?」
朝倉は、ゼロに武器がないか、聞きました。
ゼロ「あるぞ。受け取れ。」
朝倉は、ゼロから武器受け取りました。
その武器は、紅く染まった銃でした。
ゼロ「それは、クレッセント・ローズだ。今のままだと、子銃形態だが、大剣形態、大鎌形態、薙刀形態があるが子銃形態でも行けるだろうな。」
朝「分かった、ゼロ。僕は、これ、クレッセント・ローズを使いこなせるようになってみせる。」
朝倉は、倉庫へ侵入した。
倉庫に、入った朝倉は、物隠れた。
(大きい部屋には障害物があまりなあまりない。加えて相手の武器は刀や銃などバラバラ、この広い部屋では戦いやすいが、先に人質の場所を確認したい。)
朝「ゼロ、どこに人質がいるか索敵してくれ。」
ゼロ「もうやっている。」
ゼロは倉庫内を索敵した。
そして、小さな部屋から声がした。

「へへへへ、ガキを二人連れてくるだけでこんなに金が入るのですかい？」
「そりゃそうだろう、ここら辺じゃ有名な、バニングス家の令嬢と月村家の令嬢だぞ？これくらい普通だろう？」
「そうだな。だが何故月村家の令嬢もなんだ？バニングス家だけでも大金だが」
　そう三人の男たちはそう言った。どうやら人質の二人は、この町では有名な貴族の様なものらしい。その二人を誘拐し、身代金を要求、受け取ったらこの町から去るつもりなのだろう。
「あ・・あんたたち・・なんのつもり!?」
　その人質の一人が声を荒げながらそう言った。金髪でロング、水色の目をした少女だ。気の強い言い方だが、声が震えていた。五歳で誘拐されたのだ。怖いのも無理はないだろう。
「・・・・・・」
　一人は何も言わずにただ男を見てる紫色の髪に黒目の少女だ。
　目に涙が溜まっているため、怖くて声も出ないのだろう。
「ああ？どうするって、お前ら使って金を要求するんだよ。」
「なら私だけでいいじゃない!!なんですずかも一緒なのよ!!」
　と金髪の少女は言った。どうやら人質の二人は友人らしい。紫色の髪の少女はもい一人の少女を心配そうに見ていあた。
「それは・・・」
　そこまで言ったリーダー格の男の言葉を遮り、下っ端らしい男が話した。
「それより兄貴少しいいですか？」
「・・・・なんだ」
　リーダー格の男は少し怒気を含みながら、下っ端に聞いた。
「その・・ですね？金を貰った、こいつらどうするんですか？」
「・・・・ここに置いて、倉庫を爆破するがそれがどうした？」
「「!!??」」
　人質の二人、そして朝倉はそその言葉を聞いて驚愕していた。方法が普通ではありえないから驚いたのだ。

だが、下っ端の言葉に三人は更に驚愕する。いや、人質二人にとっては恐怖になる。
「その前に、こいつらの身体、楽しませてもらえませんか？」
「!!??」
その言葉に二人は驚愕していた。朝倉は怒りを露わにしたが、少し落ち着かせた。
「なんだ？お前、小さいのが好きなのか？・・・・手短にな」
「へい！ありがとうございます!!」
下っ端は目の色を変え、人質二人に視線を向ける。二人は「ビクッ!!」と肩を揺らし、後ずさる。
朝「突入する！」
朝倉は部屋に突入しようしたが、ゼロに呼び止められた。
ゼロ「待て。これを使え。」
そう言うとゼロはフラッシュグレネードを出した。
朝「ありがとうゼロ。」
朝倉はゼロにお礼を言った。
「さあ、楽しませてもらうとするか!!」
「いや・・・・!!こないで・・・・・!!」
なんて事をしていたら、人質と男性の声が聞こえた。どうやら今まさに襲う瞬間らしい、その声を聞いて、すでに朝倉は覚悟を決めていた。絶対に少女たちを助けると。
朝「朝倉宗介、任務及び目標の殲滅、人質の救出を開始。」
朝倉は、扉を開け、中にフラッシュグレネードを投げる、爆発音と共に眩い光が広がる。男達は目を押さえて苦しんでいた。その隙にクレッセント・ローズ（子銃形態）のライフルショットで、男性三人の頭を衝撃波で撃ち、気絶した。
朝「まずは、三人っと。」
朝倉はそう言うと、周りを見た。どうやら部屋の中に男達は三人のみ。今のところ外から増援が来る気配もなかった。
朝「殲滅、一旦完了。救出に向かう。」
朝倉は二人の元へ向かう。二人は目をやられてはいないらしく、朝

倉をジッと見つめていました。
朝「大丈夫ですか？」
朝倉は二人に向けてそう言った。二人は無言で首を縦に振った。どうやら怪我もなさそうだ。朝倉は内心ホッとする。
朝「そうか、とにかくここから脱出します、立てますか？」
朝倉は二人に問いかけました、二人は互いを見つめ合い、そして首を縦に振った。その時
「なんだ!?今の光はなんだ!?」
「ガキのいる部屋からだぞ!?まさか助けが来たのか!?」
部屋の外から複数の男性の声が聞こえた。どうやらフラッシュグレネードの光に気づき、確認に来たらしい。朝倉は小さな声で二人に言った。
朝「突撃する。僕につかまって。」
朝倉はクレッセント・ローズ（大鎌形態）男達前にガンブラストし、道を突き抜けた。
「「きゃあぁぁぁぁ!!!!」」
少女二人の悲鳴が上がったが、気にしなかった。
ガンブラストを止めると少女二人は泣いていた。悪かったと思っている。
出口走っていると一人男性の声した。男性は朝倉こんな提案をしてきた。
「なあガキ、バニングス家の令嬢はいいが、月村家の令嬢は助けなくてもいいじゃないか？」
男性はそんな事を言い出した。朝倉は怪訝な顔を男性に向けていた。人質の一人を助け、一人は助けなくてもいいとそういっているからだ。
朝「貴方は何を言っている？人質を見捨てろと僕にそう言っているのか？」
「お前も知っているだろう？月村家の秘密を」
そう言うと、ビクッ!!と紫色の髪の少女は肩を揺らした。どうやら月村家の令嬢というのはこの子らしい。なら、もう一人がバニングス

家の令嬢なのだろう。
朝「月村家の・・・・秘密？」
「なんだ？知らないのか？ならおしえてやるよ。そのガキの秘密を」
「いや・・・やめて・・・言わないで!!!」
「月村家はなぁ、・・・吸血鬼の一族なんだぜぇ・・・つまりなぁ・・
月村家はなぁ、「バケモノ」の一族なんだよぉぉ!!!」
「いやぁぁぁぁぁぁ!!!」
そう言われて少女は膝から崩れ落ちる

???ｓｉｄｅ
言われてしまった・・・・私の・・・私たちの秘密を・・・・
これでもう・・・・私はアリサちゃんに嫌われる・・・・
化物と言われて・・・私はアリサちゃんと一緒にいたいだけなのに・・・
私は家族と「普通」に暮らしたいだけなのに・・・
私は秘密を誘拐犯に明かされ、膝から崩れ落ちる。そして目から涙を流して嗚咽をこぼしていた。
これでもう私の居場所が無くなる。今までの楽しい時間は戻ってこない。目の前の男の子も、もう助けてはくれないだろう。私はこの男に殺されるとそう思っていた。
「それが、どうした？」
「・・・・・・・え？」
その男の子の言葉を聞くまでは・・・・

朝倉ｓｉｄｅ
「・・・・・・なに？」
朝「だから、それがどうした？」
男性に向けて、朝倉はそう言った。
「どうしたって・・・・そいつは吸血鬼なんだぞ!?化物なんだぞ!?助ける必要ねぇだろうが!?」
男性は声を荒げながらそう言った。

朝倉は苛ついていた。
朝「貴方の言っている事は信用性がない、この子が吸血鬼である理由にはならない。」
「だから助けるってのか!?」
朝「・・・・確かに、今のお前の言う通り、も仕方ない彼女は吸血鬼なのかもしれない」
朝倉がそう言うと、彼女は表情を暗くし、顔を俯かせ、涙を流す」。
朝「だがな」
朝倉が目を閉じ、そこで言葉を切ると、全員の視線が朝倉に向く
そして朝倉は目を開き、クレッセント・ローズ（子銃形態）を男性に向けて

朝「僕はこの子とは初対面だ、彼女を見た時間は救出に来た数分だ。だけどそれだけでもわかることがあるーーー

彼女はお前達に怯え、お前達に反抗した友達を心配する、そして喜び、悲しみ、怒りなどは彼女にはある!!

だから!!彼女は普通の人間だ!!!お前達の言う様な化物ではない!!」
朝倉は怒気を含んだ声で男性に向かって叫んだ。そう言うと彼女は目を見開き、大粒の涙を流した。
そして彼女の友達は、僕の言葉に便乗して叫んだ。
「そ・・・そうよ!!!すずかが吸血鬼だろうとなんだろうと、
私の大切な親友よ!!あんたの言う様な化物じゃないのよ!!!」
「アリサちゃん・・・・」
彼女達は互いに顔を向いて、涙を流し笑い合っていた。その光景は至って普通の親友同士で笑い合う光景だった。
朝「あんたの言葉は間違いだったな・・」
朝倉は男性に向けて言葉を放った。朝倉は視線を向ける。すると男性はワナワナと体を震わせ、朝倉に視線を向ける。顔には怒りの表情が出ていた。

「ガキがぁ!!!なめんじゃねぇ!!!」
男性は刀を構え、朝倉の方へ駆け出す。朝倉はライフルを男性に向けて引き金を引こうとした瞬間、
ドゴオオオオオオン!!!!
侵入した扉から轟音がなった。扉が原型を留めてなかった。
そして次の瞬間、声が朝倉の横を通った。
「カーネージシザー!!!」
「がぁ!?」
「「!!??」」
声が聞こえた後、駆けていた男性の身体が宙を舞うその光景に驚愕していた三人は男性を吹き飛ばした人物に目を向けた。白髪の紅いコート、朝倉は知っていた。
朝「随分と、遅かったですね?ラグナさん。」
ラ「うるせーよ。それは気にするな。」
朝倉は遅かったラグナをもて遊んでいました。
ラ「あと、警察と彼女の家族が到着しているぞ。家族に会わせてやれ。
朝「分かった。」
朝倉は彼女、月村すずかを家族に会わせました。
家族に会わせると、今までの恐怖から解放されたからか泣きながら家族に抱きついていた。
少し微笑ましい光景だった。
すると彼女達は話をしていると、僕に視線を向ける。そしてすずかと呼ばれていた少女が家族と話していると、顔を険しくさせ、僕に視線を向けていた。そして僕の方来た。
「妹を助けてくれてありがとう」
女の人は僕にそう話しかけてきた。すずかに似た紫色の髪の、しっかりしてそうな人、妹と言っていたから姉だろうと朝倉は思った。
朝「見過ごす訳にもいかないからな、それよりあなたは?」
忍「ああ、ごめんなさい、私は月村忍、この子の、月村すずかの姉よ。」

朝「僕は朝倉宗介です。こっちはラグナだ。」
ラ「ラグナだ。よろしくな。」
忍「ラグナさん、よろしくね、それで朝倉君、月村家の秘密を知ったって本当？」
忍は顔を険しくさせ朝倉に聞いた、どうやら男の話した事は本当のことらしい。
朝「すずかが、吸血鬼だと言う話ですか？」
忍「聞いたのね、アリサちゃんも聞いたらしいからもしかしたらと思ったけど。」
朝「聞いたと言うより、誘拐犯が勝手に話したと言う方が正しいですが。」
忍「そうなのね、それでね朝倉君、月村家の秘密を知ったからにはあなたをこのまま帰す訳にはいかないのよ。」
その言葉に、朝倉達は警戒する。忍の顔は明確な殺意があったからだ。だがそこにすずかが、割って入った。
す「お姉ちゃん!!宗介君は私達を助けてくれたんだよ!?」
忍「確かにそうだけど、それはそれ、これはこれなのよ、私は月村に迫る危険は排除しようと考えてる。」
す「朝倉君が危険だって言いたいの!?」
忍「分からないわよ!!けど少なからず誘拐犯を無力化できる力を持っているのよ!!充分危険だわ!!!」
忍にそう言われすずかは黙ってしまった。それもそうだろう。なぜならすずかは朝倉が誘拐犯を無力化するのを目の前で見ているのだから。
忍「見苦しいところを見せたわね、ごめんなさい。」
朝「気にしないでください、あなたがやっている事は、間違いじゃないですから。」
忍「ありがとう。さて朝倉君、秘密を知ってしまった以上あなたには二つのうち、どちらかを選んでもらいます。一つは月村に関する記憶を消して過ごす事、もう一つは、この秘密を誰にも話さない事を誓って、すずかと一緒に暮らす事。」

す「お・・・・お姉ちゃん!?／／／／」
すずかは顔を赤くし、忍に言葉をかける。記憶を消すか、秘密を共有して話さない事、簡単な二択でした。朝倉は答えました。
朝「分かりました。僕は何も喋りません。」
朝倉は即答した。その言葉にすずかと忍に呆気にとられていた。我に帰った忍はその即答に疑問を抱いた。
忍「即答ね…理由を聞いてもいいかしら?」
朝「僕にも話したくない事もありますから。ですがすずかのものは僕よりも重いものですから。
それに僕が話す事ですずかの未来をなくしてしまう。それは、嫌ですから。」
忍「・・・・分かったわ、なら私は何もしない、あなたは信用できるからね。」
そして、犯人が捕まり、恐怖から解放され、家族と再開した。これでもう、誘拐事件が終わった様に見えた。

あいつの声が聞こえるまでは

「この化物がぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
「「「「!!??」」」」
突然叫びに全員が声の発した人物に目を向ける。それはあの男性だった。警察の拘束から逃れ、刀を振り上げ、すずかに向かって駆け出していた。その場にいる全員が最悪の結果を予想してしまった。
「うぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
す「きゃあああああ!!!」
忍　アリサ「「すずかぁぁぁぁぁぁぁ!!!」」
男性の叫びと共に振り下ろされる刀、すずかの悲鳴、忍とアリサの叫び、
この場面ですずかを助けることができる人は誰もいない。
たった一人を除いては。

すずかｓｉｄｅ
男性の声を聞いて、視線を向けたら、刀を振り上げ駆け出す男だった。
その対象は私だった。私だけは・・「化物」だから・・・
逃げようと思ったが、走ってくる男を見て、腰が抜けて立つことすらできなかった。目の前に男が迫り、刀が振り下ろされる。
ああ・・・・私は死ぬだ・・・私は化物だから・・・
その時、今まで、一緒にいてくれた家族、アリサちゃんの事を思ってしまう。走馬灯というものなのだろう。アリサちゃんと楽しく遊んだ事、家族と一緒に過ごした時間が、思い出す。
私は・・・・まだ・・・家族と、アリサちゃんと、一緒にいたかったなぁ・・・
私は目を閉じて、死を覚悟した。
ドンッ!!!
す「痛たっ…」
だけど、痛みは横から来た。誰かに押されていた？
すると私の顔に何かが付く、顔に手を当て、私は目を開けて手を見る。
手についたものを見た時私はうまく声が出なかった。
す「あ・・・・ああ・・・・あああ・・・!!」
私の手についていたのは、血だった。でも私が斬られたわけではない。ならこれは誰の血なの？私は男の走ってきていた方を見る。
そして私は息を呑んだ。私の居たところに宗介君がいた。
だが、私は宗介君を見て、涙を流していた。
なぜなら宗介君は

左腕が無くなり、鮮血が出ていたのだから

朝倉ｓｉｄｅ
朝「・・・・!!」

すずかに刀が振り下ろされる瞬間、朝倉はすずかを右から押した。そして刀が振り下ろされる。刀は朝倉の左腕を切り落とした。
斬られた場所から鮮血が吹き出し、鋭い痛みが走る。
朝「・・・・・・っ!!!!」
朝倉は、痛みに顔を歪めるが、すぐに相手の顎を殴り、相手を気絶させた。相手を気絶させた後、朝倉は斬られた場所を右手で抑える。
そしてすずかに視線を向ける。
朝「大・・・丈夫・・・です・・・か・・・・・・すずか・・」
す「あ・・・・・・宗介君・・・私を・・・・庇って・・・・」
朝「怪我・・・・は・・・ないか・・・・」
す「私・・より・・宗介君が・・・・」
朝「何・・・すずか・・が・・・気に・・・する・・ことは・・ない・・・・」
すずかに怪我はない様だ。朝倉は自分の左腕を見る。血は止まってなくまだ流れていた。何か縛るものが有れば止血ができるのだが。
忍「救急車!!急いで!!早く!!」
忍は救急車を呼んでいた。警察以外に救急車は来てなく、忍は焦燥と怒気を含んで電話をしていた。
ア「ちょっと!!あんた!!大丈夫なの!!??」
朝「あなたは・・・・アリサ・・・だっ・・・たか?」
ア「あんまり喋らないの!!出血が酷いのよ!!??」
アリサは顔を青くしながら、朝倉を心配する。五歳で同じ年齢の朝倉が左腕を失い、そこから鮮血が出ているのだ。耐性が無いのに気絶をしないのは大したものだろう
ラ「宗介!!」
ラグナは朝倉に駆け寄る。朝倉はラグナに苦笑いを浮かべる。無駄な心配をさせない様に。
朝「ラグナ・・さん・・僕は・・・大・・丈夫・・・です・・」
ラ「左腕を失って大丈夫なわけないだろう!?早く止血を!!」
ラグナは急いで止血をしている。
朝「大・・丈夫・・です・・死には・・しな・・・い・・」

そう言って朝倉は倒れてしまう。ラグナは体を動かしながら名前を呼ぶ。すずかと、アリサも朝倉に駆け寄る。

ラ「宗介!!目を開けろ!!宗介!!」

す「宗介君!!目を開けて!!宗介君!!」

ア「まだお礼も言ってないのよ!?さっさと起きなさいよ!!」

三人は朝倉に呼びかける。すずかとアリサは泣いていた。その直後、忍が救急隊員を連れ、到着する。ラグナが同行し、朝倉が搬送される。

すずか、忍、アリサは事件の重要参考人として、警察で、事情聴取を受け、家に帰っていった。

こうして誘拐事件は朝倉宗介の重傷、犯人は全員確保で幕を閉じた。

場所は海鳴大学付属病院、朝倉宗介はここに搬送され、入院している。

あれから三週間、朝倉宗介はまだ、目を覚まさない。

蒼ととある高校生と来るべき再開

朝「・・・・・う・・・」

誘拐事件から約三週間たった日のこと。朝倉は目を覚ました。

見知らぬ天井が目に入り、周囲を確認する。

朝「ここは・・・・どこだ？」

朝倉は周りを確認し、棚の上にはゼロがあったが、自分の部屋ではない事を確認する。そして、意識を失う前の記憶を辿る。

朝「そうだ・・・誘拐犯がすずかを狙って・・僕は・・」

朝倉はすずかを庇った事を思い出し、身体に異常はないか確認する。右足が動かなくなっていた。そして、やはり左腕は失っていた。

朝「右足が動かなくなっている？そして左腕はないか・・すずかを守ることができたからいいか・・・」

朝倉はすずかを守れた事、そのためなら右足と左腕の損失は仕方ないものだと決め、棚の上にあるゼロを手に取る。

朝「ゼロ、聞こえるか？」

ゼロ「気が付いたか。」

朝「ついさっきな。それでここはどこだ？」

ゼロ「海鳴大学付属病院だ。あれから三週間ほど眠っていたぞ。」

朝「三週間!?そんなに経っていたのか・・・僕が寝ている間何かあったか？」

ゼロは朝倉が眠っていた時のことを話す。朝倉が眠った後、病院に搬送された事、犯人が全員捕まった事、ラグナ達が毎日見舞いに来てくれた事、アリサやすずか達が泣きながら見舞いに来てくれた事などだ。

ゼロ「まあ、これだけだな。ノエルとセリカ・・だったか？ここに来ては泣いていたことだな。」

朝「なんか・・すまなかった・・。」

ゼロ「謝るのは俺にじゃないだろう？」

朝「みんなに、か・・・」

ゼロと会話をしていると、コンコンと扉がノックされる。誰かがお

見舞いに来た様だ。時間はお昼を過ぎている。誰かが来てもおかしくはない。
ゼロ「誰か来たな。」
朝「入っていいですよ。」
朝倉は扉の向こうにいる人物に声をかけた。その時扉が勢いよく開かれる。スパァン!!と良い音がなるほどだ。扉の向こうにいたのはラグナ達だった。ノエルとセリカは涙を流していた。
セリカ　ノエル「「宗介君!!」」
二人は勢いよく朝倉に抱きついた。抱きついた時朝倉は身体に痛みが走り、表情を歪めた。
ラ「おいセリカ、お前のせいで宗介が顔を歪めているぞ。」
セ「あっ！ごめんね、宗介君。」
セリカは抱きついていることにより、顔を歪めた朝倉を見て謝った。
朝「いいですよ。気にしませんから、それよりラグナさん、あの後どうなったんですか？」
ラ「ああ、それはな・・・」
ラグナがそう言いかけると、
コンコン
と扉を叩く音がする。また誰かが来た様だ。
ジ「僕が出よう。」
ジンがそういい、扉を開けて、部屋の中に案内した。見舞いに来たのはアリサの家族、そしてすずかと忍だった。すずかは何故か忍の後ろに隠れていた。何かしたかなぁ？
「君が宗介君かな？」
朝倉がそう考えていると、男の人が話しかけてくる。金髪でどこか優しげな男だった。
朝「そうですが・・・あなたは？」
「おっと、これは失礼、私はデビット・バニングス、君が助けてくれたアリサの父親だよ。そしてこっちがジョディ・バニングスだ。」
デビットがそう言うと、ジョディと言われた女の人が、朝倉の方を

向く。そしてアリサを連れてこちらに来た。
ジョ「初めまして、ジョディ・バニングスよ。」
朝「知っていると思いますが、僕は朝倉宗介です。それで、何か用ですか？」
朝倉がそう言うと、二人は朝倉に向かって、頭を下げた。朝倉は二人の突然の行動に慌てました。
朝「あの、えっと・・・何をして・・？」
デ「君には礼を言わせてくれ。君がいなかったら私達は娘を失うところだった・・・本当にありがとう!!!」
ジョ「私からも礼を言わせて。ありがとう。」
朝「なんか照れますね…」
朝倉は照れました。するとアリサが気まずそうに話しかけてきた。
ア「ね・・・・ねぇ」
朝「なんでしょうか？」
ア「ありがとう、あの時助けてくれて。」
朝「別に礼を言われる事じゃないですから、僕にできることをしたいから、それだけですから。」
アリサに礼を言われ、朝倉はそう答えた。自分がやりたいから、それをしただけ、ただそれだけなのだ。そう言いつつ、朝倉はアリサの頭を優しく撫でた。アリサは最初は驚いていたが、慣れてくるにつれ、目を閉じ気持ち良さそうにしていた。その光景をデビットとジョディが微笑みながら見ていた。そこにすずかと忍がやってくる。
忍「宗介君、怪我は大丈夫なの？」
朝「大丈夫・・・と言いたいが、この状態ですから。」
朝倉は動かない右足となくなった左腕を指した。
忍「随分と冷静だね・・・」
朝「それはいいが・・・なんですずかは忍の後ろに隠れているんですか？」
朝倉は隠れているすずかの事を忍に聞く。すずかは朝倉と視線が合うと肩を震わせ、隠れてしまうのだ。
忍「すずかは責任を感じているのよ。」

朝「・・・何も責任を感じることはないはずですが？」
朝倉はそう言った。別に朝倉がすずかに何かをされたわけでもない。だからすずかが、責任を負うことはないはずだ。すると、すずかが忍の後ろから現れた、涙を流して、視線を朝倉に向けて言った。
す「あるよ・・・私のせいで宗介君は怪我したんだから。」
朝「あなたは何も悪いことをしていないでしょ？僕が守りたい人がいるからやった、それだけですから。」
朝倉はそう言うが、すずかは納得がいっていないのか、表情を暗くする。
朝「はぁ・・仕方ない・・すずかさん、近くに来てください。」
朝倉はため息を吐くとすずかを近くに呼んだ。すると、朝倉はすずかの頭を撫でた。
す「・・・・・・・・え？」
すずかは呆気に取られた顔をしている。他の人達も同じだ。全員が僕がすずかに何かしようとしていると思っていたのだろう。
朝「すずかが何物でも僕は自分の守りたいものを守る、ただそれだけです。」
す「そう・・・すけ・・君・・うぅ・・うわぁぁぁん!!!」
すずかは大粒の涙を流し、朝倉に抱きついた。朝倉はすずかを優しく受け止め、頭を優しく撫でる。アリサ達も涙を流しながら、その光景を黙って見ていた。しばらくの間病室にはすずかの泣き声だけが聞こえていた。
忍「それで宗介君、左腕はどうするの？義手をつけるの？」
ラ「それなんだが・・宗介・・本、持っているだろう？」
すずかが泣き止んだ後、忍が朝倉にそう聞いた。すると、朝倉より先にラグナが答え、朝倉に何かを聞きました。
朝「本って・・これ？」
そう言うと、手から本が出てきた。
ラ「そう、それだ。それを左腕に近づけてみろ。」
そう言って朝倉は本を左腕に近づけた。すると、本が光出し、光がなくなると、左腕があった。ラグナを除いたみんながびっくりしてい

ました。
朝「ラグナさん、あの本は一体なんですか？」
ア「そうよ！なんなのか説明しなさいよ！」
朝倉とアリサはあの本がなんなのかラグナに聞いた。
ラ「ああ、あれは蒼の魔導書、別名ブレイブルーと言う物だ。」
朝倉　アリサ「「蒼の魔導書？」」
朝倉とアリサは蒼の魔導書がなんなのかラグナに聞いた。
ラ「そいつは原書とも呼ばれる魔導書だ。魔素の塊で構成されていて、魔素がなければ左目と左腕が動かなくなる。だが、動くってことは魔素があるようだな。」
ア「なんであんたが知っているのよ！」
ラ「そりゃあ、俺が持っているからだ。」
そう言うと、アリサは黙った。
す「ねえ・・退院したらまた会えるかな？」
すずかは寂しそうに聞いてきた。
朝「それはどうかわからない。会えるかもしれないし、会えないかもしれないからね。」
す「そう・・なんだ」
ア「なによ!!せっかく友達と遊べると思ったのに!!」
朝倉はアリサの言葉に驚愕していた。
朝「友達？」
ア「そうよ／／／なによ!?文句があるわけ!?／／／」
朝「いや、ないがいいのか？」
す「私も・・宗介君・・友達になりたいな・・ダメかな・・？」
二人は友達になってほしいと聞いていた。
朝「分かりました。こんな僕でもいいなら友達になってほしい。僕にとって、最初の友達ですから。」
朝倉がそう言うと、二人は顔を合わせて喜んでいた。朝倉はその光景を見て微笑んでいた。
その後、アリサ達は家に帰り、ラグナだけ残っていた。
ラ「宗介、蒼の魔導書について言いたい事があるがいいか？」

朝「蒼の魔導書についてですか?ラグナさん。」
ラグナは朝倉に蒼の魔導書について言った。メリットやデメリットがあることを話していた。
朝「なるほど蒼の魔導書は、最強だけどその分近くの人の生命力を奪うか・・・」
ラ「まあ、そんな感じだな。だから、退院した後は身体を鍛えないといけないからな・・」
そう言い、ラグナは家に帰った。朝倉はゼロを呼んでこう聞いた。
朝「今守らないといけない人はいるか?」
ゼロ「今いないな。強いて言えば、守る人は4年後だな。」
朝「そうか・・・」
ゼロ「それより宗介、お前には小学3年生の時、私立聖祥大学付属小学校に入学してもらうぞ。」
朝「分かりました。」
それから退院した後、戦闘訓練や魔法についての勉強、そして入学する小学校の勉強をしていた。

そして、時間が4年後、朝倉は8歳になり、いよいよ転入の日になった。
セ「宗介君、今日は転入の日だよ。」
朝「分かっているよ、セリカさん。」
ラ「おい、今日は早い出るんじゃあないのか?」
朝倉は時間を見るともういかなければならない時間になっていました。朝倉はゼロを首にぶら下げ玄関に手をかける。
朝「行ってきます!」
セリカ　ノエル「「いってらっしゃーい」」
朝倉は扉を開けて、学校までの道のりを進む。ゼロにこう聞きました。
朝「ゼロ、この年に守れる人はいるのか?」
ゼロ「そうだな。ラグナがそういっているからな。」
ゼロがそう言うと、路地裏から声がした。女性の声が響いた。

「いや!!離して!!」
そう聞こえ、朝倉は路地裏に入った。
朝「おい、やめてあげろよ、その女性が嫌がっているだろう?男として最低だな・・・とりあえず帰ってもらおうか。」
朝倉はそう言うと、男性はこっちに気が付いた。
「あぁ?なんだてめえ邪魔するとどうなるか分かっているんだろうなぁ!!」
男性は朝倉に向かって殴りかかっていた。
朝「遅いですね。はっ!」
朝倉は避けて、男性に向けて当て身した。男性は吹っ飛び、倒れた。
朝倉は女性を立ち上がらせた。
朝「大丈夫ですか?」
ひ「あっ、はい!大丈夫です。あなたは誰ですか?あたしは上原ひまりだよ!」
どうやらその女性の名は上原ひまりって言うらしい。名前を聞かれたから言わなければならない。
朝「僕は朝倉宗介です。よろしくお願いいたします。」
ひ「よろしくね!宗介君!」
いきなり名前呼びすごいな…すると、上原さんはこんなことを聞いてきた。
ひ「ねえねえ!スマホ持っている?持っているならメールと電話番号を交換しようよ!」
朝「そんな簡単に交換していいのですか?」
ひ「いいでしょ?」
朝「まあ、いいか。」
こうして朝倉と上原はメールと電話番号を交換しました。
朝「やばい!また後でー!」

ひまりｓｉｄｅ
ひ「あっ、行っちゃった・何に急いでいたんだろう?」
そういって、時間を見ると上原は汗を流していました。

ひ「やばい！早く行かないと学校に遅刻する！」
ひまりは焦って学校に行きました。

朝倉ｓｉｄｅ
朝「とりあえず着いた～そして、でかいなぁ～」
朝倉はそのデカさにびっくりしました。
「君が朝倉宗介君かな？」
朝「はい、そうですが？」
「やっぱりそうなのね、私があなたの先生なの、よろしくね。」
朝「はい、よろしくお願いします。」
朝倉はそう言い、先生に頭を下げた。
先生「はい、よろしくね、それよりその足と腕は？」
朝「この足と腕はもう治らないんです…」
先生「ご、ごめんなさい!!思い出させてしまって。」
朝「いいえ、別に大丈夫です。それより、僕のクラスはどこですか？」
先生「そ、そうだったわね！こっちよ、ついてきて」
そう言われて、朝倉は先生の後をついていく。
これから朝倉のこの世界で初めての学園生活が始まる。

なのはｓｉｄｅ
私はクラスの教室に入る。そして私は新しくできた友達二人に挨拶をした。
な「すずかちゃん！アリサちゃん！おはよう!!」
ア「おはよう！」
す「おはよう、なのはちゃん。」
私の新しいお友達のアリサちゃんとすずかちゃんと挨拶を交わす。
学校に入学した後、二人と友達になって学校がとても楽しくなった。
私達が談笑していると、クラスメイトの女の子が話しかけてくる。
「ねぇねぇ、３人はもう知ってる？」

「「なにが？」」
「あのね、今日このクラスに転校生が来るらしいよ。」
な「転校生？」
「うん、担任と制服を着た初めて見る子が、職員室に入っていったんだってさ」
ア「それならこのクラスに来るわねそれで男子？それとも女子？」
「見た人が言うには、男子だって。しかもかっこいいんだって」
す「へぇ～どんな人なんだろう？」
そう思っているとチャイムがなってしまう。私たちは急いで自分達の席に座った。座った直後、先生が教室に入ってきた。
先生「皆さん！おはようございます、授業を始める前にお知らせがあります、今日この教室に転校生がやってきます!!」
先生のその言葉に、教室の中に歓喜の声が上がる。新しい仲間が増えるのは嬉しい事だから。
先生「さて、じゃあその転校生に来てもらいましょう。扉の前で待ってもらってますからね。じゃあ・・・入って来て!!!」
先生がそう言うと扉が開き、全員の視線が扉に向かう。そして入ってきた男の子を見て、私は目を見開き、涙を流していた。白髪で蒼色の目をした男の子、４年前、私の話を聞いてくれた、男の子を見て私は名前を呼んだ。
な「宗介・・・くん？」

朝倉ｓｉｄｅ
朝倉は先生に呼ばれ、教室の中に入った。教壇の横に立ち、周りに視線を向けていた。
（うん？あれは・・・はぁ・・これは奇跡的だな・・アリサとすずかと・・・なのは!?）
朝倉はそれは驚いていた。なぜなら自分が助けた人達がいたからだ。
先生「彼がこれからこのクラスに入る子です！彼は不慮の事故により、右足が動かないのと、左腕ががありませんが、仲良くしてあげて

ください。じゃあ自己紹介、お願いね？」
先生は朝倉に目配せをして朝倉は頷き、朝倉は自己紹介する。
朝「朝倉宗介です、先生の言う通り、僕は右足が動かなくなっているのと、左腕がありません、ですが、みんなと仲良くなりたいと思っています。よろしくお願いします。」
朝倉はうまくいった思っていました。その時
ア「そ、宗介!?あんたが転校生なの!?」
す「ほ、本当に宗介君!?夢じゃないよね!?」
アリサとすずかが、席を立ち、朝倉に詰め寄る。
って、顔が近い近い！
朝「落ち着いてください、二人とも」
ア「落ち着けるわけないでしょ!?退院した後どうしてたのよ!?教えてくれてもいいじゃない!?」
アリサはそう言うが、朝倉は二人の連絡先を知らない。だから連絡しようにもできなかった。
先生「あら？朝倉君、二人と知り合いなの？」
先生が朝倉にそう聞く。先生の質問にクラスの全員が、首を縦に振る。どうやらクラスの全員も先生と同じ疑問を待っていたらしい。
朝「二人とは4年前に友達になった。4年前に誘拐事件があったのをみんな知っていますか。」
先生「確か、アリサちゃんとすずかちゃんが拐われたのよね？有名な事件よ」
朝「その事件の場に僕が居合わせたんだ。二人が拐われた瞬間を見て、助けに行ったんだ。」
「「そ!!???」」
その言葉にクラスにいる全員が驚愕する。もちろん僕やアリサとすずかは驚きもしない。
先生「あなたは何をしているの!?警察を待つべきでしょう!?」
朝「見過ごせなかったんです・・海鳴港の倉庫内で拐われた二人を助けたんだ、その時誘拐犯の一人がすずかを狙って刀を振り下ろしたんだ。僕はそれを庇い、左腕を斬られたんだ。左腕が無いのはそれが

理由です。」
朝倉がそこまで言うと、クラスの全員は朝倉を見る目が変わった。かっこいいだけではなく、優しいというプラス材料によって好意の目を向けていた。
先生「そうだったのね、でもそれはとても危険よ、あまりそういう事はしない事。いいわね？」
朝「・・・分かりました。」
そう言った時、突然ガタン！と音が鳴る。全員が視線を向けると一人の女の子が、立っていた。
先生が女の子に声を掛ける。
先生「高町さん？どうかしましたか？」
そう、立った女の子は、なのはだった。目を見開き、朝倉を見て涙を流す。その姿に全員は驚愕しているが、朝倉は表情を変えないでいる。なのはは、朝倉に近づき声をかけた。
な「そ・・・宗介君？本当に・・朝倉宗介君？」
なのはは、声を震わせながら、朝倉に聞いた。
朝倉はなのはの目を見て、答える。
朝「４年ぶりですね、高町なのは・・・

家族に自分の気持ちと我が儘はちゃんと言えましたか？」
朝倉がそう答えるとなのはは、大粒の涙を流しながら、朝倉に抱きついた。
「「えええええええ!?」」
ア「な、な、なのは!?」
す「な、なのはちゃん!?な、え!?」
クラスの全員の絶叫が聞こえ、アリサとすずかが、顔を赤くしながら、なのはの名前を呼ぶ。朝倉はどうすればいいかわからなかったので、ゼロに通信をする。
朝「ゼロ、僕はどうすればいいですか？」
ゼロ「・・・頭を撫でたらいいんじゃないか？」
ゼロにそう言われて、朝倉はなのはの頭を撫でた。その時クラスか

ら歓喜の声と悲鳴が上がる。そして先生に止められるまでこの状態が続いた。

朝倉の学校初日は、ここから始まったのである。

ラグナ達、学生になる!?

一方、ラグナ達は・・・
ラ「どうしてこうなったんだ・・・」
ラグナ達はとある学校に来ていた。その学校の名は私立聖祥大学付属学校である。何故このような事になったのか、それは数時間前に至る・・

～数時間前～
セリカはみんなを呼び、椅子に座らせた。
ラ「それで、話ってなんだ?」
ラグナがそう言うとセリカはこう答えた。
セ「今日みんなに学校に行ってもらおうかなってね。」
ラグナ　ジン「「・・・・は?」」
ノ「・・・えっ?」
そう言うと、セリカ以外のみんなは固まった。
『はあああああ!?（えええええ!?）』
すると、ラグナ、ジン、ノエルは驚愕していました。それもそのはず、ラグナ達は２０歳以上なのだから。
ラ「だが、どうする?俺達は２０歳以上、つまり大人になっているが。」
セ「あっ、それは大丈夫だよ。話は付けてあるから。」
ジ「なら、仕方ないな。セリカ、その服はあるんだろうな?」
セ「うん!あるよ!今、取ってくるね!」
そう言うと、セリカはラグナ達の制服を取りに行った。しばらくすると、三人の制服を持ったセリカが来ました。
セ「お待たせ～みんなの制服を持って来たよ!」
セリカは持って来た制服を三人に渡しました。
ラ「じゃあ、着替えてくる。」
三人は着替える為、自分の部屋に入りました。

～数分後～
ラ「ほらセリカこれで大丈夫だろ？」
ラグナはセリカに制服を確認させた。
セ「うん！大丈夫だよ。」
ラ「そうか、しかし、制服ってのは辛いな・・なんかゴワゴワするし、大変なんだな・・」
ジ「兄さん・・そんなことで大変だと思うならこの先大変だよ。」
ラ「あ？なんでだ？」
なんで大変なのかを聞くと、ノエルが答えました。
ノ「それはですね・・宿題とテストが面倒だからです！」
ジ「それはお前が勉強全然してないからだろ。」
ノ「ちょっと!?それは言わないでください！」
そう言うと、ノエルはジンをポカポカ叩いていました。
ラ「おい、もう時間ねぇじゃあねぇの？」
セ「えっ？そんなはずは・・・」
セリカはまだ早い思っていたのか、余裕を持っていたがいざ時間を見ると冷や汗を垂らしていました。
セ「わわっ、急がないと遅れちゃう！」
ラ「そういう事は早く言え!?」
ラグナ達は急いで支度をして玄関に手をかける。
『行ってきます！』
セ「気をつけてね～」
セリカはラグナ達に手を振った。
そして現在至る・・・
ジ「仕方ないよ兄さんは学校に行ったことがないからね・・・」
ノ「まあ、悔やんで仕方ありませんよ。」
ラ「ああ、そうだな。とりあえず、職員室ってところに行くか・・・」
ラグナ達は職員室に行った。
ラグナにとってこれが初めての学園生活が始まる。

ひまりｓｉｄｅ
私はクラスの教室に急いで入る。そして私は五人の幼馴染に息切れしながら、挨拶をした。
ひ「ハァハァ・・・おはよう・・みんな・・」
「また遅刻になりそうだったよ?ひまり。」
ひ「蘭、それは言わないで!?寝坊しかけたけど、間に合ったからいいでしょ?」
ひまりの声に答えたのは蘭ちゃんでした。私はその言葉に焦りました。
「ひまり、あれほど夜ふかしは遅刻しやすいって言ったんだけどなぁ・・」
ひ「うっ・・・し、仕方ないじゃん!テニスのスケジュールとか大変だったんだから!」
「とか言ってア～ちゃん本来より遅かったじゃないですか～」
「うっせ。気にしないことだな。」
ひまりを注意した、その子は茶髪の黄色と紫色のオッドアイの男の子の名は、レインハルト・ストラトス。
レインハルトをア～ちゃんって呼んでいる子は白髪の翠色の女の子は、青葉モカちゃんです。
ひ「そ、それで今日転校生がこのクラスに入るらしいね!」
レイン「話逸らした・・」
蘭「ま、まあ、話が進まないから話を聞こうと。」
ひ「で、その転校生は三人で、二人が男の子で一人が女の子らしいよ。」
「元春みたいな奴じゃないといいな。」
「「うんうん」」
そう言った青年の名は高町恭弥。高町家の長男で、剣道をやっているらしい。確かに、元春君は見た目はいいんだけど、ナルシストで、私達や他の女子にもちょっかいをかけていた。はっきり言って迷惑でしかない。
「それはないんじゃないかな?」

恭「どうしてそんなことが言える？つぐみ。」
「それはあたしが説明するよ。」
蘭「巴、どう説明するの？」
巴「その男性二人が職員室から出た後、困っている人がいると助けていたからさ、元春がつぐみにちょっかいかけられていた時助けられたしな。」
レイン「何？それは本当か？」
レインハルトと恭弥はびっくりしていました。確かにあの元春君がやられてしまうって転校生は恭弥と同じなのかな？
モ「へぇ～特徴はなかったの？髪とか目の色とかさ～」
巴「えっとね、特徴は・・」
巴が特徴を言おうとしたら、チャイムがなってしまう。私達は急いで自分達の席に座った。座った直後、先生が教室に入ってきた。
先生「皆さん、おはようございます、授業を始める前にお知らせがあります、今日この教室に転校生がやってきます。」
先生のその言葉に、教室の中に歓喜の声が上がる。
先生「じゃあその転校生三人に来てもらいましょう。扉の前で待ってもらってますからね。じゃあ、入って来てください。」
先生がそう言うと扉が開き、全員の視線が扉に向かう。

ラグナｓｉｄｅ
ラグナ達は先生に呼ばれ、教室の中に入った。教壇の横に立ち、周りに視線を向けていた。
先生「この子達がこれからのクラスに入る子です。皆さん、仲良くしてあげてください。じゃあ自己紹介、お願いね？」
先生はラグナ達に目配せをしてラグナ達は頷き、ラグナ達は自己紹介する。
ノ「ノエル・ヴァーミリオンです。よろしくお願いします。」
ジ「ジン・キサラギだ。」
ラ「ラグナ・ザ・ブラッドエッジだ。よろしくな。」
（大丈夫・・だよな？）

（これでいい・・はず）
（なんか二人が心配です・・）
ラグナ達は自分達の自己紹介に心配しました。
先生「何か三人に質問はありますか？」
先生が三人に質問を聞くと席に座っていた三人以外は質問を言おうとしてラグナ達に質問聞こうとしている。
ちなみに質問は二時間かかったらしい。
質問が終わった後、一人席から立っていました。
先生「どうかしましたか？元春君。」
先生が元春に聞くと元春は怒っていました。
元「お前・・さっきの邪魔した奴か!!お前がいなかったら、つぐみと遊べるところだったのに!!」
ラ「それを・・つぐみと言ったか？そいつは嫌がっていただろう、嫌がっている奴を無理矢理連れて行き、自分と遊べば喜ぶとでも思っていたのか？まさか他にもちょっかいをかけているのか？だとしたらてめえはバカだな。」
元「つぐみ達は俺の友達なんだ!!俺と遊べばいいに決まっている!!」
元春の言葉に、クラスの女子の全員が冷たい目で元春を見ていた。
ジ「彼女達は自分で相手を選ぶだろう。お前が勝手に思っている事を押し付けるな。」
ジンの言葉につぐみ達は同意する。
ひ「そうだよ！私達は元春君の友達じゃあないよ！」
モ「モカちゃん的に嫌だな～」
巴「そうだな、あんたと友達なんて絶対にごめんだね。」
つ「私も嫌だなぁ、元春君みたいなタイプは私苦手だから」
蘭「ていうか、あんた私達と友達になっていると思っていたの？」
つぐみ達の言葉にクラスの女子は首を縦に振る。元春は目を見開き驚いていた。
巴「それにラグナさんは私達を助けてくれたんだ、それだけで友達だろ？」

その言葉に元春は怒りの表情をしながらラグナを睨みつけている。そしてラグナに指をさした。
元「ラグナ・ザ・ブラッドエッジ!!俺と勝負しろ!!」
ラ「勝負だと?」
元「そうだ!この後に体育の授業がある!俺と勝負しろ!そして俺が勝ったら二度とつぐみ達に構うな!!」
元春の発言に全員が驚愕していました。
だが、ラグナは元春に視線を向けていた。
ラ「・・・いいぜ・・勝負を受けようじゃねえか・・・」
ノ「兄様?!」
ラグナの返答にノエルは驚愕の声を上げた。
ラ「ただし、条件がある。」
元「なんだ?ハンデが欲しいのか?」
ラ「ハンデなどいらねぇ・・条件は俺が勝ったら、このクラス全員の願いを一つずつ叶えてもらうぞ。それともお前は俺に負けるのが怖いか?」
ラグナは元春を挑発する。その挑発に元春は顔に青筋を浮かべ、ラグナを恨む。
元「望むところだ!!!首を洗って待っていろ!」
元春はそう言うと自分の席に戻って、腕を組んでいた。
ラグナは視線をクラスの全員に向ける。
ラ「みんなすまねぇ・・俺のせいで面倒なことになってしまった。すまなかった。」
ラグナは頭を下げ、謝罪する。ラグナは自分のせいで全員の授業を妨げてしまったと思ったからだ。だがクラスメイトは
「気にすんなよ!元春にはみんな迷惑してんだからさ!」
「そうだよ!ラグナ君、元春君なんかに負けないでね!」
クラスのみんなは、気にせず、ラグナの応援をしていた。どうやらみんなも元春には迷惑しているらしい。ラグナはクラスの全員に目を向ける。
ラ「分かった。必ず勝ってみせるさ!」

ラグナはそう宣言した。

そして場所は体育館になる。ラグナと元春は向かい合っている。他のみんなは二人から離れ、見守っている。

元「逃げずにここに来たな!!」

ラ「逃げる必要がないからな、負けるつもりはねぇよ。」

元春はラグナに向けて嫌味を言うが、ラグナは全く反応せず、返答する。

元春は悔しがっていたが、すぐに微笑を浮かべる。

ラ「・・・一つ聞いていいか?勝負をすると言っていたが、何をするんだ?」

そう、ラグナは対戦内容を知らないのだ。元春は場所は指定したが、勝負の内容は説明しなかったなのだ。

元「勝負するのは、ドッジボールだ!!」

ラ「ドッジボール?」

ラグナは首を傾ける。ラグナは指名手配になっていたので、娯楽や遊びに関しては全くの無知なのである。

ジ「兄さん、僕が教えるよ。」

ラグナのもとへジンが駆け寄り、ドッジボールの簡単な説明をした。

〜説明中〜

元「おい!ルールは分かったか!?」

ラ「あ、待たせたな、始めようか。」

ラグナがそう言うと、先生がホイッスルを鳴らす。試合が始まった。

元「初めから全力だ!おりゃあああ!」

元春はラグナに向けてボールを投げる。なかなかの球速だったが、ラグナにとっては遅すぎる、左腕を上に上げ、飛んできたボールを受け止める。

元「な、なんだと!?」

元春は驚愕の声を上げる。何故片手でボールを受け止める力があ

るのか。元春はラグナを見てそう思った。
ラ「これを奴に当てる・・」
ラグナはそう言い、元春にボールを投げる。投げられたボールは元春に向けて一直線に飛んでいく。元春はボールを受け止めようとしたが、勢いを殺すことができず、ボールがはじかれた。そしてボールは地面に落ちる。
先生「・・・はっ!?しょ、勝負はラグナ君の勝ち!!」
先生が宣言すると体育館に歓声が上がる。ラグナが圧倒的な勝利をした。その事にクラスの全員クラスメイト達は喜び、ラグナを囲んでいた。だが元春一人は悔しがっていた。
元「う、?だ!?俺が負けるはずがない!!」
ラ「現実を受け入るんだな、勝負は俺の勝ちだ。条件はのんでもらうぜ。」
ラグナは元春に向け声をかけた。だが次の行動にクラスメイト達は驚愕する。
元「お前さえ・・お前さえいなければぁぁぁぁ!!!」
元春は怒りながらボールをラグナに向けて投げたのだ。ラグナはボールを避けたが、その直後悲鳴が上がる。ラグナはボールに視線を向けると、飛んでいく方向に女の子がいた。女の子は避けようとしていたが、間に合わない。
ラ「!!ちっ!」
ラグナは舌打ちをし、女の子の前に出る。そして左手でボールを受け止めた。先程より球速が増しており、受け止めた時に左手に痛みが走るが、ラグナは顔を歪めることはないが、なんとかボールを受け止めた。
ラ「・・・大丈夫か?」
ラグナは女の子に声をかける。
つ「う・・・うん。ありがとう///」
女の子は顔を赤らめている。その時ジンが頭を抱えていました。
俺が何をしたって言うんだよ・・
ラ「お前に怪我がないならそれでいい。」

つ「う・・うん。あっ、私は羽沢つぐみ、つぐみでいいよ。」
ラ「そうか、なら俺はラグナでいい。よろしくな。」
つぐみとラグナは挨拶を交わす。そこへ四人の女子と二人の男子がやってきた。
蘭「つぐみ、大丈夫？」
巴「全く元春の奴！つぐみに当たったらどうするんだ！」
ひ「本当だよ、でも無事でよかったよ」
モ「大丈夫～？」
「つぐみ!!大丈夫か!!」
「つぐみさん!!大丈夫ですか!?」
つ「うん。私は大丈夫です！」
蘭達はつぐみの無事を確認した後、つぐみを連れて元春のところへ向かった。どうやら俺の提案した条件、願いを元春に言いに行ったらしい。そこへつぐみを心配していた男子がやってくる。
「つぐみを守ってくれた事、礼を言わせてくれ。ありがとう。」
「つぐみを助けてくれて、ありがとうな。」
ラ「気にすんなって、それよりあんたらは？」
「ああ、すまない。俺はレインハルト・ストラトス、アインでいいぜ。」
「高町恭弥だ。恭弥でいい、よろしく。」
ラ「よろしくな。恭弥、レイン。それで二人とも、元春への願いは決まったのか？」
恭「そうだな。あいつが迷惑をかけた、女の子に手を出すなって言うつもりだが、レイン、お前はどうする？」
レイン「俺は別にいいぜ、言うことはないからな。ラグナはどうする？」
ラ「俺は何も言わなくてもいい、ただあんたらが言っていいぜ。」
レイン「そうだな。」
その後、ラグナは恭弥達と談笑していた。
二人はラグナに「友達になろうぜ」と言われ了承していた。

波乱とＩＱ２００の人

放課後、ラグナ達は家に帰ろうとしていた。
だが、門の近くに人が立っていました。ラグナはその人に話しかけた。
ラ「よう、レイン、恭弥。どうしたんだ？門の前に立って。」
レイン「ああ、ラグナか。お前達を待っていたんだよ。恭弥がさ、今日のお礼がしたいんだとよ。」
恭弥「そうだ、俺のお母さんが経営している翠屋に行くぞ。」
ラ「そうか、ならお言葉に甘えさせてもらうぜ。ジン、ノエル行くか？」
ラグナは振り返り、二人に聞いた。
ジ「兄さんがそう言うんだったら、僕は構わないよ。」
ノ「兄様・・・私もいいですが、セリカさんはどうするんですか？」
ノエルはセリカを置いてどっかに行きたくないらしい。だが、ラグナは考えていたことを話す。
ラ「だったらそこで何か買ったらいいんじゃないか？お土産とかさ。」
ノ「・・そうですね。そうしましょうか。」
ノエルは納得してくれたらしい。ラグナは元に戻り、恭弥に聞く。
ラ「んじゃ恭弥、道案内頼むぜ。」
恭弥「分かった。ついてこい、案内する。」
こうしてラグナ達は恭弥のお母さんが経営する翠屋に行く事になった。
ジ「？なんだ？」
ラ「どうしたジン？」
ジ「いや・・何でもない。」
ラ「そうか。」
ジンは何かを感じ取ったが気のせいと思いました。

朝倉ｓｉｄｅ

朝「いないか？」
ア「ええ、誰もいないわ。」
す「そう、アリサちゃんは周囲を警戒していて。」
な「アリサちゃん、すずかちゃん・・そこまでしなくても・・」
ア「あのねなのは、あんたのお兄さんは重度のシスコンなのよ？」
な「あっ・・・」
なのはは自分のお兄さんがそう言う事になるのを想像しました。
朝「まあさっさと、翠屋に行きますよ。なのは、案内お願いね。」
な「分かったなの！」
朝倉はなのはについて来ました。

～数分後～

朝倉達は翠屋に着きました。夕方だというのに、お客さんが沢山いる。相当人気らしい。
な「ただいまーー！」
「おかえりなさい、なのは。」
すずか　アリサ「お邪魔しまーす！」
朝「お邪魔します。」
「アリサちゃん達もいらっしゃい・・・あら？初めての子もいるのね？」
朝倉は女性に視線を向ける。なのはと同じ茶髪でロング、エプロンを付けている。年齢はわからないが、若そうだ。
朝「はじめまして、朝倉宗介です。今日からなのはのクラスメイトになりました。」
「!!そうなの・・・あなたが・・」
朝「・・・？」
女性の反応からして、朝倉の事を知っているらしい、だが朝倉は女性とは初対面のはずだ。
「ああ、ごめんなさいね？私は高町桃子、なのはの母親です。」
朝「・・・母親？」
桃子の発言に朝倉はなのはと桃子、交互に視線を向けた後、怪訝な顔をする。

朝「・・・若くないか？」
桃子「あら？嬉しい事言ってくれるわね？」
朝倉の発言に桃子は微笑み、朝倉の頭に手を乗せ、撫でていた。

～数分後～
朝「もういいか？」
桃子「ああ、ごめんなさいね？」
桃子は朝倉から手を離した。そして朝倉達は頼んでいたケーキを食べながら談笑していると、奥のテーブルから声がした。視線を向けると、知っている人がテーブルの席にいました。朝倉はその席に近づきました。
朝「何やっているんですか？ラグナ。」
ラ「おっ、宗介じゃねえか。どうした、こんなところに来て。」
朝「それはこっちが聞きたいよ、どうやってここに来たんですか？」
確かにラグナ達だけではここへは来れないはずだ。では何故これたのか？
ラ「恭弥に道を案内してもらっていたからな。」
朝倉は恭弥と思われる人を見ると、いきなり睨まれました。そしてその人はこっちに来ました。
恭弥「お前が忍の言っていた宗介か？」
朝「そうですが・・・何か？」
恭弥「そうか・・・なら!!」
恭弥はどこからか木刀を取り出し朝倉に向けて降った。
朝「危なっ!?」
ゴスッ!!と鈍い音がなる。朝倉は間一髪でよけましたが恭弥は朝倉にもう一回木刀を降りました。しかし、木刀は朝倉に当たる前に止まりました。
ラ「落ち着け、恭弥」
「そうですよ!?室内で暴れないでください！」
恭弥「ラグナ、レイン。これが落ち着いていられるか！」
恭弥は朝倉に進もうとしたがラグナとレインに止められて動けな

くなった。そこへ音を聞いたなのは達と見たことがある人と人形が来ました。
な「お兄ちゃん!?何しているの!?」
なのはが恭弥に対して叫ぶと恭弥はなのはの声を聞き、止まりました。
す「恭弥さん、私達を助けてくれたんだよ。だから、やめてほしいな。」
ア「そうよ!そこまでしなくてもいいと思うわ!」
恭弥「し、しかしだな・・・」
恭弥は少し動揺したがすぐに冷静になった。
「大丈夫か君?」
朝「はい、大丈夫ですが・・あなたは?」
「俺か?俺はレインハルト・ストラトス。レインでいいぞ。」
朝「はい!よろしくお願いします。」
そんなことしていると暗くなりラグナ達は家に帰りました。
『ただいまーー!』
セ「お帰りなさい~ご飯出来ているからね~」
そして朝倉達は夕食を食べ、風呂に入ってラグナとジンはベランダにいました。

ラグナｓｉｄｅ
ラ「さて、どうするか・・・なあ、ジン?」
ジ「そうだね・・・兄さん。僕は嫌な気配がしているだ。」
ラ「大変なことにならなかったらいいな。」
そう言って空を見上げた。すると星が沢山降りました。
ラ「おっ、流星群ってやつか?綺麗じゃねえか・・」
ジ「確かに、兄さん。綺麗だね・・ところで兄さん・・何か感じないか?」
ラ「ああ、確かにな、ジン。・・・おい、出てこいよそこにいる奴!」
そう言ってラグナは後ろに振り向きました。半透明で

「・・・どうして」
ラ「分かりやすいんだよお前は。」
ジ「それに僕は幽霊から気配を感じるやすいんだ。」
「ふ～ん・・・あんた達は？」
ラ「俺らか？俺はラグナ・ザ・ブラッドエッジだ。こっちが・・・」
ジ「ジン・キサラギだ。よろしく。」
「ラグナにジンね・・・分かったわ。私はアリサ・ローウェルよ。」
ラ「そうか、よろしくな。」
そう言うとラグナはあくびをしました。
ラ「さて、もう寝る時間だ。ローウェル、あんたはどうする？」
ロ「そうね・・・ねえ、空いている部屋はない？」
ラ「空いている部屋ならあるが・・・どうするんだ？」
ロ「決まっているじゃない、ここに住むのよ！」
ラグナとジンは唖然としました。
ラ「まあ、いいんじゃねえの？」
ジ「しかし兄さん、これは僕ら決めていいことじゃ・・・」
ラ「分かってるよ。だが、宗介だって絶対にいいと思っているはずだろ？」
ジ「・・・分かったよ兄さん。」
ラ「うし、じゃあもう寝るか。」
ロ「ええ、そうね・・じゃあおやすみ～」
ラ「ああ、おやすみな。」
そう言うとローウェルは部屋に入りました。

ローウェルside
私はベッドの上にいた。私にはわからなかった。私は帰国子女でちょっと頭いいだけで友達もできなかった。それのせいか、知らない大人達に連れ去られて、殺され、感情がほとんどなくなってしまったから。けど、ラグナと言う人は私に優しくしてくれた。私はそれが嬉しかった。その優しさを胸に私は寝ました。

白い天使、黒い死神降臨

朝「・・・眠い・・・」
朝倉は眠たそうにしているが、体を伸ばした。
朝倉は着換えをし、ゼロを首につける。
リビングに降りるとセリカが朝食を作っていた。
朝「おはよう、セリカ。」
セ「あっ、宗介君。おはよう～ちょっと待ってね?ラグナ達を起こしてくるね!」
セリカはラグナ達を起こしに朝倉はそう待っているとセリカが戻ってくる。みんなは眠たそうにしているが起きてきた。
朝「おはよう、ラグナ。」
ラ「ああ、おはよう、宗介。」
ラグナは挨拶をしたが、歩き方がぎこちなかった。
朝「どうしたの?ぎこちない歩き方して。足が悪いの?」
ラ「いや、そう言う訳ではないんだがな・・・ほら出てこいよ。」
「待ちなさいよ!心の準備がまだ・・・」
ラ「いいから俺の後ろから出てこいよ。」
そう言うとラグナは後ろから誰かを手に持ち、前に出させる。
朝「えっと・・・ラグナ。この子は?」
ラ「こいつか?・・・こいつはなあ・・・」
ラグナが少女の名前を言う前に少女が言い出した。
「ちょっと待って、ラグナ。自分から言わせてほしいわ。」
ラ「ん?そうか分かった。」
少女がそう言うとラグナは言うのをやめそして、少女は朝倉の前に立ち、自己紹介をした。
ロ「はじめまして、私はアリサ・ローウェルよ。よろしくね。」
朝「僕は朝倉宗介。よろしく。」
ロ「宗介ね・・・分かったわ。」
朝倉は違和感を覚えた。
朝「ねえ、ローウェル。あなた、もしかして幽霊ですか?」

朝倉に言われてローウェルびっくりしていました。
ロ「なんで分かったの？」
朝「ほら、基本的に幽霊は影がないからね。意外と分かりやすいんですよ。」
ローウェルは唖然としていましたが、すぐに元に戻りました。
ロ「まあ、いいわ。ほら、さっさと朝食を食べるわよ。」
そして、今朝食を食べています。朝倉達は談笑していると、ラグナからこんなことを聞いてきた。
ラ「なあ、宗介、学校の事なんだが、少し早く家を出てみるか？」
朝「・・・なぜです？」
ジ「確かに、兄さんの言う通りだ。宗介、お前はいつも一人で登校しているな。僕が言えることではないがたまには友達と一緒に登校してみたらどうだ？」
確かに、朝倉はいつも一人で登校している。一人と言っても、ゼロと一緒である。
朝「なのはと登校しろって？」
ノ「なのはさんと言うのですか、たまにはいいんじゃないでしょうか？」
後日分かったのだが、宗介の家となのはの家は意外と近所なのだ。なので一緒に登校するのは簡単である。
朝「そうですね、たまにはいいか。」
朝倉はそう言い、朝食を食べ終え、なのはの家に向かう。
そして朝倉はなのはの家に到着する。インターホンを鳴らし、少し待つ。すると「はーい」という言葉の後扉が開く、出てきたのは桃子だった。
朝「おはようございます、桃子さん。」
桃子「あら？宗介君じゃない、どうしたの？」
朝「たまにはなのはと一緒に登校しようと思って、なのははいますか？」
桃子「あら♪そうなの？ごめんね？なのはならまだ寝てるのよ・・・そうだわ♪宗介君、ちょっといいかしら？」

朝「なんでしょうか？」
桃子は朝倉を手招きし、朝倉を家に上げる。そして桃子は微笑みながら朝倉に耳打ちをした。

なのはｓｉｄｅ
な「・・・・うーん・・・ふあぁぁぁ」
私は身体を起こし、小さくあくびをした。窓を見ると、太陽の光が部屋を射していた。
な「・・・なんか・・変な夢・・・」
私は今朝、夢をみたの。男の子が変な生き物を追いかける夢。なんだったんだろう？私はそう思いながら、リビングに降りる。
な「おはよう・・・」
桃子「おはよう、なのは」
な「おはよう、お母さん・・・・・あれ？」
私はお母さんに挨拶を返す。だけどおかしい。だっていつもならお母さんは朝ご飯の準備をしているはずなの！でもキッチンから音がする。誰かいるのかな？キッチンの方を見るとお姉ちゃんがいるの。
な「お母さん、まさかお姉ちゃんに朝ご飯作ってもらってるの？」
桃子「ふふふふ♪今日はある子が作ってくれているの」
な「ある子？」
お母さんと話していると、キッチンから話が聞こえるの。
美由紀「美味しい!!どうしてこんなに美味しいの!?」
「家で練習してますから簡単なものは出来ますよ。ほら、出来ました。」
するとキッチンから男の子が出てきたの。私はその男の子を見て驚愕したの。
な「そ、宗介君!?」
そう、料理を作っていたのは、宗介君だったの!!

朝倉ｓｉｄｅ

朝倉の姿を見てなのはは目を見開いていた。だが朝倉は真顔で表情を変えなかった。
朝「おはよう、なのは。」
な「あっ、うん・・おはよう・・じゃなくて!!な、なんで宗介君が家にいるの!?／／／」
顔を赤らめ、なのははそう聞いた。その質問には桃子が返す。
桃子「宗介君は、なのはと一緒に学校に行こうと思ってきてくれたのよ？」
な「・・え？本当？」
朝「ああ、本当だ。？言ってどうする。」
そう言うと、朝倉は扉の方へむかった。
な「どこにいくの？」
朝「外で待っておく。それと格好は見なかったことにしておくから。」
な「・・・え？」
なのはは、自分の格好を確認する。パジャマの格好で寝癖がたっている。ガチャンと音がした後、静寂が部屋を包むが、数秒後
な「にゃあああああ!?」
顔を赤らめ、なのはは部屋を出る。ビューン！と音が出るのではないかと思うほどだ。
～数十分後～
なのはと朝倉は一緒に学校に登校していた。
ですが、なのはの様子がおかしい。顔を赤らめ、朝倉の顔をチラチラと視線を向けるが、朝倉が視線を向けるとプイッと視線を逸らす。
朝「・・・なのは？」
な「にゃ!?ど、どうしたの？宗介君」
朝「さっきのが恥ずかしかったんですか？それなら謝りますが。」
な「う、ううん!?大丈夫だよ!?」
朝「・・・そうか。」
なのはがそう言っているから大丈夫なのだろうと思った朝倉はそれ以上は聞かなかった。その後二人はバスの中でアリサ達やラグナ

達と合流し、学校へ登校し、授業を受けていた。
そして放課後、朝倉達は公園へ向かっていた。すると湖にかかっている橋とボートが壊れていた。
そこには数人の男性と警察がいました。
「ああ、危ないから、入っちゃいけないよ?」
ア「あ、はい、あの、何かあったんですか?」
「ああ、橋とボートが壊れてしまってね?片付けているんだよ、勝手に壊れたような感じでもないし、我々警察も調べてもらってるんだよ」
アリサは警察の一人と話している。するとその時
「助けて・・・・・・」
朝「・・・・?」
声が聞こえた時、朝倉は周辺を見る。すると、なのは達が突然走り出してしまった。朝倉達はそれを後を追うように走り出す。走っている最中朝倉はなのは達の行動に疑問を持っていた。
朝（なのは達にもあの声が聞こえていた?声の主は誰だ?）
そんな事を考えていると、朝倉達はなのは達に追いつく。するとなのはの手に何かが抱かれていた。
よく見ると動物のようだ。
朝「どうしたんだ、その動物。」
ラ「傷だらけじゃないか。どうしたんだ?」
な「この子ボロボロのなの!お医者さんに見てもらおう!!」
ジ「近くに動物病院がある、急ぐぞ。」
朝倉達は急いで動物病院に向かう。獣医さんに見てもらうと、命に別状はないらしい。その後なのは達と別れ、朝倉達は帰宅していた。
するとラグナとゼロが朝倉に話しかける。
ラ「宗介、どうやらあの獣野郎には何かあるぜ。」
朝「どういう事?」
ゼロ「奴から微弱だが、魔力反応がある。魔法で変身しているのだろう。」
朝「そうなの?覚えておこうか。」
そんな話をして、帰宅後、夕食を食べた後、朝倉は部屋でのんびり

としている。その時
「助けて・・・・」
　またこの声だ。頭に響くこの声は一体なんなんだ?朝倉は頭を抑えながら外へ出た。すると玄関の前に誰かが立っていた。
ラ「待て、どこに行くつもりだ。」
朝「どこって・・・動物病院ですが?」
ラ「宗介も聞こえたのか、仕方ねえ・・宗介、行くぞ。」
朝「分かった。」
　朝倉はラグナと一緒に動物病院へ向かう。病院に着いた後朝倉とラグナは驚愕していた。道路には砕けたような跡があり、病院は見る影もなくなっていた。その時、大きな音が響いた。
　音のした方へ向かうと、なのはがフェレットを抱え、ある生物から逃げていた。
朝「ゼロ、セットアップ。」
ゼロ「了解、ＳＥＴ　ＵＰ」
　朝倉はゼロを纏う。いつものウィングゼロの姿になった。
朝「ラグナ、これを。」
ラ「宗介これは?」
　ラグナは朝倉から渡されたものを聞く。
朝「それはラグナのデバイス、デスサイズだ。今はブレスレット、つまり待機状態です。魔力でできた大きな鎌を持ち、多くの敵を切り裂くものです。そして、シールドの先が開くと魔力でできた刃が出てくるようになり、シールドが発射される。発射した後は自動で戻ってくるから安心してね。」
ラ「ああ、分かった。じゃあ、デスサイズ!セットアップ!」
　そう言うと、腕、足、胴体に装甲が付き、黒と白のツートンカラーの装甲になっていた。
　ラグナは鎌を出し、朝倉に聞く。
ラ「宗介、行くぞ。」
朝「ええ、行きますよ。」

なのはｓｉｄｅ
な「ええ?ええええ!?」
私はまたあの声が聞こえてから動物病院にいったの。そしたら変な生き物があのフェレットを襲っていた。私はフェレットを抱えて生き物から逃げていた。
「君!聞こえているかい!?」
するとまたあの声がした。でも周りには誰もいない。すると抱えていたフェレットが離れて、首にかけている赤い玉を外した。
「こうなったら封印するしかない!でも僕じゃできないから君にやって欲しい!」
な「フェ、フェレットが喋った!?」
そう、声の主はフェレットだった。フェレットから赤い玉を受け取る。
「僕の後に続いて、言葉を言って!!」
な「え?う、うん、わかったなの!」
だがその直後、あの生物が私達に攻撃をしてきた。フェレットとの会話に夢中になっていたから避けられない。私はそう思い、目を閉じた。
だけど、痛みは襲ってこない。
な「・・・・あれ?」
不思議に思い目を開けると、私と生き物の間に割って入った人がいた。いや、人ではないかもしれない。なぜならそこにいたのは、
天使と死神のようなロボットだったのだから。

朝倉ｓｉｄｅ
朝「間に合ったか・・・」
朝倉は化物の攻撃を弾き、サーベルで切り裂いた。
な「え・・・ロボット?」
「こ・・・・これもデバイスなのか!?」
なのはとフェレットは驚いたような声を上げる。朝倉はゼロ越し

に声をかける。
朝「大丈夫ですか？」
な「え!?宗介君!?」
朝「はい、怪我はしていないか？」
な「う、うん!!大丈夫なの!!（また助けてもらった／／かっこいいなぁ宗介君／／／）」
顔を赤らめ、なのははそう答える。どうやら外傷はないらしい。
朝「少し離れてください。俺が相手をする。」
「ま、待ってください!!」
フェレットは朝倉達に話しかける。朝倉達は驚愕したが、直ぐに冷静になった。そしてフェレットに話しかける。
ラ「・・・喋っただと？」
「あれは普通に戦っても倒せません！奴に付いているジュエルシードを封印しないとダメなんです!!!」
朝「ジュエルシード？」
朝倉達は視線をフェレットから、化物へと視線を向ける。奴の体には一つの宝石が付いていた。
ラ「・・・何か策があるのか？」
「はい！少しの間でいいです、時間を稼いでくれませんか？」
ラ「いいだろう・・・宗介！足止めするぞ！」
朝「わかりました！」
そう言い、朝倉達は化物に斬りかかる。そして少し離れて朝倉はマシンキャノンで、ラグナはバルカン砲で化物を撃ち続けていた。
すると、なのは達がいる方から突然、輝き始めた。そして光が収まると、朝倉達は目を疑った。なのはの服が私服から学校の制服のようなものに変わっていたのだ。
「よし、成功だ!!」
フェレットは歓喜の声を上げる。朝倉達は化物の相手をしながら、何故なのはが変わったのかずっと考えていました。
朝「何で服が変わるんですかね・・・」
ラ「多分俺達と同じデバイスと言う奴じゃねえの？」

朝「ふ～ん・・・」
そんなことを話していると、フェレットが話しかけてきた。
「あの！ジュエルシードを封印します！」
朝「わかりました！」
朝倉は化物を蹴り飛ばす。そして化物から離れると桃色の閃光が奴を飲み込んだ。
視線を向けるとなのはが撃ち出した物らしい。
ラ「・・・凄い威力だな、どれだけの魔力量なんだろうな。」
朝「そうだね・・・（あれよりは下か・・・まあ、そうでしょうね。）」
な「リリカル　マジカル！ジュエルシード封印！」
なのはがジュエルシードを封印したらしい。それを見て朝倉達はなのはの近くへと駆け寄り、なのはに声をかける。
朝「なのは、急いで離れるよ。」
な「え？どうして？」
なのはは首を傾けながらそう尋ねる。
朝「今の騒動で他の人が聞こえていないと思いますか？」
そう言うと、パトカーの音が響いてきた。
な「にゃ!?ご、ごめんなさい～～!!」
そう言い、なのはは飛び去ってしまう。
朝「仕方ない・・・追いかけますよ。」
ラ「わかった。」
ラグナは朝倉につかまり、朝倉はなのはの後を追いかける。追いついたのは公園に着いた時だった。
な「ご、ごめんね宗介君、急に飛んでっちゃって。」
朝「気にしないでください、それで、フェレット?さん。話を聞かせてもらいましょうか？」
「あっ、はい、話すよ。」
朝倉達はフェレットの話を聞いた。ジュエルシードは発掘された物であり、輸送中、ジュエルシードを落としてしまった事などだ。
ラ「それで、あんたはどうしたいんだ？」
「できれば、僕は一人でやるんだ。僕の責任でもあるんだ。」

フェレットからは覚悟が感じられる。だが、一人で探すには効率が悪すぎる。

ラ「・・・仕方ない、宗介、お前もやるだろ？」

朝「ああ、そうだがなのははどうする？」

な「もちろん！なによりほっとけないもん！」

ラ「決まりだな、ということで俺らはそれに参加させてもらうぜ。」

「ありがとう、それじゃあ自己紹介をしておくね、僕はユーノ・スクライア、ユーノでいいよ、よろしく。」

な「私は高町なのは、よろしくね！ユーノ君!!」

朝「僕は朝倉宗介です、よろしく、ユーノ。」

ラ「俺は、ラグナ・ザ・ブラッドエッジだ、よろしく頼むぜ。」

その後、朝倉はなのはを家に送った後、朝倉達は自分の家に帰って寝ました。